尾形了斎覚え書

芥川龍之介

今般、当村内にて、切支丹《きりしたん》宗門の宗徒共、邪法を行ひ、人目《じんもく》を惑《まど》はし候儀に付き、私見聞致し候次第を、逐一《ちくいち》公儀へ申上ぐ可き旨《むね》、御沙汰相成り候段屹度《きっと》承知仕《つかまつ》り候。

陳者《のぶれば》、今年三月七日、当村百姓与作後家篠《しの》と申す者、私宅《わたくしたく》へ参り、同人娘里《さと》（当年九歳）大病に付き、検脈致し呉れ候様、懇々頼入り候。

右篠と申候は、百姓惣兵衛の三女に有之《これあり》、十年以前与作方へ縁付き、里を儲《まう》け候も、程なく夫に先立たれ、爾後再縁も仕らず、機織《はたお》り乃至《ないし》賃仕事など致し候うて、その日を糊口《ここう》し居る者に御座候。なれども、如何なる

心得違ひにてか、与作病死の砌(みぎり)より、専(もっぱ)ら切支丹宗門に帰依(きえ)致し、隣村の伴天連(ばてれん)ろどりげと申す者方へ、繁々出入(でいり)致し候間、当村内にても、右伴天連の妾(てかけ)と相成候由、取沙汰致す者なども有之、兎角の批評絶え申さず、依つて、父惣兵衛始め姉弟共一同、種々意見仕り候へども、泥烏須如来(でうすにょらい)より難有(ありがた)きもの無しなど申し候うて、一向に合点仕らず、朝夕、唯、娘里と共にくるすと称(とな)へ候小き磔柱形(はりきがた)の守り本尊を礼拝(らいはい)致し、夫与作の墓参さへ怠り居る始末に付き、唯今にては、親類縁者とも義絶致し居り、追つては、村方にても、村払ひに行ふ可き旨、寄り寄り評議致し居る由に御座候。

右様の者に候へば、重々頼み入り候へども、私検脈の儀は、叶ふまじき由申し聞け候所、一度は泣く泣く帰宅致し候へども、翌八日、再私宅へ参り、「一生の恩に着申す可く候へば、何卒御検脈下され度」など申し候うて、如何様断り候も、聞き入れ申さず、はては、私宅玄関に泣き伏し、「御医者様の御勤は、人の病を癒す事と存じ候。然るに、私娘大病の儀、御聞き棄てに遊ばさるる条、何とも心得難く候。」など、怨じ候へば、私申し候は、「貴殿の申し条、万々道理には候へども、私検脈致さざる儀も、全くその理無しとは申し難く候。何故と申し候はば、貴殿平生の行状誠に面白からず、

別して、私始め村方の者の神仏を拝み候を、悪魔外道（げだう）に憑（つ）かれたる所行なりなど、屢（しばしば）誹謗（ひばう）致され候由、確（しか）と承り居り候。然るに、その正道（しやうだう）潔白なる貴殿が、私共天魔に魅入られ候者に、唯今、娘御（むすめご）の大病を癒し呉れよと申され候は、何故に御座候や。右様の儀は、日頃御信仰の泥烏須如来（でうすによらい）に御頼みあつて然る可く、もし、たつて私、検脈を所望致され候上は、切支丹宗門御帰依の儀、以後堅く御無用たる可く候。此段御承引無之（ごしよういんこれなき）に於ては、仮令（たとひ）、医は仁術なりと申し候へども、神仏の冥罰（みやうばつ）も恐しく候へば、検脈の儀平（ひら）に御断り申候。」斯様（かやう）、説得致し候へば、篠も流石（さすが）に、推してとも申し

難く、其儘凄々(すごすご)帰宅致し候。

翌九日は、ひき明け方より大雨にて、村内一時は人通も絶え候所、卯時(うのとき)ばかりに、篠、傘をも差さず、濡鼠(ぬれねずみ)の如くなりて、私宅へ参り、又々検脈致し呉れ候様、頼み入り候間、私申し候は、「長袖ながら、二言(にごん)は御座無く候。然れば、娘御の命か、泥烏須如来か、何れか一つ御棄てなさるる分別肝要と存じ候。」斯様(かやう)申し聞け候へば、篠、此度は狂気の如く相成り、私前に再三額(ぬか)づき又は手を合せて拝みなど致し候うて、「仰せ千万御尤(せんばんごもつと)もに候。なれども、切支丹宗門の教にて、一度ころび候上は、私魂(たましひ)躯(むくろ)とも、生々世々(しやうじやうせせ)亡び申す

可く候。何卒（なにとぞ）、私心根を不憫（ふびん）と思召（おぼしめ）され、此儀のみは、御容赦下され度候。」など掻き口説（くど）き咽（むせ）び入り候。邪宗門の宗徒とは申しながら、親心に二（に）無き体（てい）相見え、多少とも哀れには存じ候へども、私情を以て、公道を廃す可（べか）らざるの道理に候へば、如何様（いかやう）申し候うても、ころび候上ならでは、検脈叶（かなひ）難き旨、申し張り候所、篠、何とも申し様無き顔を致し、少時（しばらく）私顔を見つめ居り候が、突然涙をはらはらと落し、私足下（あしもと）に手をつき候うて、何やら蚊の様なる声にて申し候へども、折からの大雨の音にて、確（しか）と聞き取れ申さず、再三聞き直し候上、漸（やうや）く、然らば詮無く候へば、ころび候可き趣（おもむき）、

判然致し候。なれどもころび候実証無之(これなく)候へば、右証明(あかし)を立つ可き旨、申し聞け候所、篠、無言の儘、懐中より、彼(かの)くるすを取り出し、玄関式台上へ差し置き候うて、静に三度まで踏み候。其節は格別取乱したる気色(けしき)も無之、涙も既に乾きし如く思はれ候へども、足下のくるすを眺め候眼の中、何となく熱病人の様にて、私方下男など、皆々気味悪しく思ひし由に御座候。

　扨(さて)、私申し条も相立ち候へば、即刻下男に薬籠(やくろう)を担はせ、大雨の中を、篠(しの)同道にて、同人宅へ参り候所、至極手狭なる部屋に、里(さと)独り、南を枕にして打臥し居り候。尤も身熱(しんねつ)烈しく候へば、殆(ほとんど)正気無之(これな)き体(てい)に相

見え、いたいけなる手にて繰返し、繰返し、空(くう)に十字を描き候うては、頻(しきり)にはるれやと申す語を、現(うつつ)の如く口走り、其都度(つど)嬉しげに、微笑(ほほゑ)み居り候。右、はるれやと申し候は、切支丹宗門の念仏にて、宗門仏に讃頌(さんしよう)を捧ぐる儀に御座候由、篠、其節枕辺(まくらべ)にて、泣く泣く申し聞かし候。依って、早速検脈致し候へば、傷寒(しやうかん)の病に紛れ無く、且は手遅れの儀も有之、今日中にも、存命覚束なかる可きやに見立て候間、詮方(せんかた)無く其旨、篠へ申し聞け候所、同人又々狂気の如く相成り、「私ころび候仔細は、娘の命助け度き一念よりに御座候。然るを落命致させては、其甲斐、万が一にも無之(これな)かる

可く候。何卒泥鳥須如来に背き奉り候私心苦しさを御汲み分け下され、娘一命、如何にもして、御取り留め下され度候。」と申し、私のみならず、私下男足下にも、手をつき候うて、頻(しきり)に頼み入り候へども、人力にては如何とも致し難き儀に候へば、心得違ひ致さざる様、呉れ呉れも、申し諭(さと)し、煎薬三貼(さんでふ)差し置き候上、折からの雨止みを幸(さいはひ)、立ち帰らんと致し候所、篠、私袂(たもと)にすがりつき候うて離れ申さず、何やら申さんとする気色(けしき)にて、唇(くちびる)を動かし候へども、一言も申し果てざる中に、見る見る面色変り、忽(たちまち)、其場に悶絶致し候。然れば、私大(おほい)に仰天致し、早速下男共々、介抱仕り候

所、漸（やうやく）、正気づき候へども、最早立上り候気力も無之、「所詮は、私心浅く候儘、娘一命、泥烏須如来、二つながら失ひしに極まり候。」とて、さめざめと泣き沈み、種々申し慰め候へども、一向耳に掛くる体も御座無く、且は娘容態も詮無く相見え候間、止むを得ず再（ふたたび）下男召し伴（つ）れ、匆々（そうそう）帰宅仕り候。

　然るに、其日未時（ひつじどき）下り、名主塚越弥左衛門殿母儀検脈に参り候所、篠娘死去致し候由、並に篠、悲嘆のあまり、遂に発狂致し候由、弥左衛門殿より承り候。右に依れば、里（さと）落命致し候は、私検脈後一時（ひととき）の間と相見え、巳（み）の上刻には、篠既に乱心の体にて、娘死骸を搔

き抱き、声高（こわだか）に何やら、蛮音（ばんいん）の経文読誦（どくじゅ）致し居りし由に御座候。猶（なほ）、此儀は、弥左衛門殿直（ぢき）に見受けられ候趣にて、村方嘉右衛門殿、藤吾殿、治兵衛殿等も、其場に居合されし由に候へば、千万実事（せんばんじつじ）たるに紛れ無かる可く候。

追って、翌十日は、朝来小雨有之候へども辰（たつ）の下刻より春雷を催し、稍（やや）、晴れ間相きざし候折から――村郷士梁瀬（やなせ）金十郎殿より、迎への馬差し遣はされ、検脈致し呉れ候様、申し越され候間、早速馬上にて、私宅を立ち出で候所、篠宅の前へ来かかり候へば、村方の人々大勢佇（たたず）み居り、伴天連（ばてれん）よ、切支丹（きりしたん）よなど、罵り交

し候うて、馬を進め候事さへ叶ひ申さず、依つて、私馬上より、家内の容子差し覗き候所、篠宅の戸を開け放ち候中に、紅毛人（こうもうじん）一名、日本人三名、各々法衣（ころも）めきし黒衣を着し候者共、手に手に彼（かの）くるす、乃至は香炉様の物を差しかざし候うて、同音に、はるれや、はるれやと唱へ居り候。加之（しかのみならず）、右紅毛人の足下（あしもと）には、篠、髪を乱し候儘、娘里（さと）を掻き抱き候うて、失神致し候如く、蹲（うづくま）り居り候。別して、私眼を驚かし候は、里、両手にてひしと、篠頸（うなじ）を抱き居り、母の名とはるれやと、代る代る、あどけ無き声にて、唱へ居りし事に御座候。尤も、遠眼の事とて、確（しか）とは弁（わきま）へ難く候へども、

里血色至極麗（うるは）しき様に相見え、折々母の頸より手を離し候うて、香炉様の物より立ち昇り候煙を捉へんとする真似など致し居り候。然れば、私馬より下り、里蘇生致し候次第に付き、村方の人々に委細相尋ね候へば、右紅毛の伴天連（ばてれん）ろどりげ儀、今朝（こんてう）、伊留満（いるまん）共相従へ、隣村より篠宅へ参り、同人懺悔（こひさん）聞き届け候上、一同宗門仏に加持致し、或は異香を焚（た）き薫（くゆ）らし、或は神水を振り濺（そそ）ぎなど致し候所、篠の乱心は自（おのづか）ら静まり、里も程無く蘇生致し候由、皆々恐しげに申し聞かせ候。古来一旦落命致し候上、蘇生仕り候類（たぐひ）、元より少からずとは申し候へども、多くは、酒毒に中（あた）り、乃至は

瘴気に触れ候者のみに有之、里の如く、傷寒の病にて死去致し候者の、還魂仕り候例は、未嘗承り及ばざる所に御座候へば、切支丹宗門の邪法たる儀此一事にても分明致す可く、別して伴天連当村へ参り候節、春雷頻に震ひ候も、天の彼を憎ませ給ふ所かと推察仕り候。

猶、篠及娘里当日伴天連ろどりげ同道にて、隣村へ引移り候次第、並に慈元寺住職日寛殿計らひにて同人宅焼き棄て候次第は、既に名主塚越弥左衛門殿より、言上仕り候へば、私見聞致し候仔細は、荒々右にて相尽き申す可く候。但、万一記し洩れも有之候節は、後

日再応書面を以て言上仕る可く、 先は私覚え書斯くの如くに御座候。 以上

申年三月二十六日

伊予国宇和郡――村

医師　尾形了斎

（大正五年十二月）

底本：「現代日本文学大系43芥川龍之介集」筑摩書房
１９６８（昭和43）年８月25日初版第1刷発行
入力：j.utiyama
校正：野口英司
１９９８年10月５日公開
２００４年２月19日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。